無口な僕と委員長な君

光野 亜寺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
無口な僕と委員長な君

【Ｎコード】
Ｎ０３２９Ｓ

【作者名】
光野　亜寺

【あらすじ】
自閉的で、不自由で、無関係な僕。
僕はあの時、一生分泣いて、一生分謝った。
だからもう、僕は、喋らない――――。
そんな僕が出会った、委員長（きみ）。
それを切っ掛けとするように、広がっていく関係性。
地味なクラスメイト。
にやける先輩。
意地悪な先生。

そんな人たちとの出会いと、交わされる言葉たち。
これは、そんな、それだけの物語。

ファンタジー要素ありの現代モノ。再開準備中……

序章（まず語るべき前提）

善と悪という概念はさて、何時何処で誰が産み出したものなのか、僕はそれを知らない。

勝手な価値観により断言されるその区別は、極めて曖昧で、不確かで、悪辣だ。

善と悪という概念。

それは罪を産む。

罪は、人を殺さないけれど。

罪の意識は、人を殺すだろう。

罪悪感に、絞め殺されるだろう。

……さて僕が何故こんなことを考えているかと言うと、僕がそれは世間一般でいうところの悪だからである。しかし悪は人により善にもなりえる———そんな思考が、この迷宮のような考察を巡らせる。

さて、僕の話だ。

ここで僕が考える（あくまで僕自信の価値観、物差しではなく、こうではないかという空想で）世間一般での悪とは、人から逸脱したモノ、である。これを前提（あたりまえ）にしておきたい。

そう、つまり、僕は逸脱した人間だ。もしくは人間から逸脱した何かだ。加えて———僕自信が、僕は良くないモノだと認識していた。

逸脱。

全く、喋らない。という要素。

無口ではなく、無言。

非コミュニケーションの極みである。

不自由であり。不通であり。不確定だ。

故に、悪。

無言の誰かは、その場の空気を害する存在である。非常に煙たい

存在だ。
だから僕は、悪なのだ。
幸いにも自殺や自害に走ることは無かった。僕は僕が嫌いなわけではないからだ。
罪悪感が薄かった。世間的にも、個人的にも、悪だったにも関わらず。少なくとも、善ではないにも関わらず、だ。
しかし嫌いではないものの、自分を卑下してはいた。僕は、逸脱した存在で、居てはならない存在だと。
それはきっと、他の全ての人間の認識にも当てはまるだろう――。

そう、思っていた。
彼女に会う前は。

その出会いで僕は、いかに自分が狭い価値観でものを考え、行動し、自閉していたのだと思い知らされることとなる。
後悔とか、懺悔とか、そういうものは縛られるものではなく、背負うものなのだと。
……これは、語らない語り部（ぼく）が、お節介な委員長（きみ）と友達になった――そんな話である。

序章（語る者と語られる者）（前書き）

登場人物紹介です

序章（語る者と語られる者）

語り部（僕）
・語らない語り部。
・超無口。
・目付き悪い。
・レンズの厚い丸眼鏡。
・白学ラン。

委員長（君）
・友達兼通訳。
・愛すべき委員長。
・お人好し。
・超ロングの三つ編み。
・紺のブレザー。

クラスメイトY
・モブ。
・ポニーテール。
・地味。
・姓は坂平（さかひら）。
・名は柚（ゆず）。

僕は君を“委員長”と呼び、君は僕を“メガネ君”と呼ぶ。
何故なら君は委員長だし、僕は眼鏡をかけているから。
クラスメイトの名前は実は坂平柚と言う。覚える必要はない。
以上。

以下、本編へ続く。

一章（僕と委員長の日常）

「大丈夫」

世界は、貴女色だった。
貴女の赤色で、満ちていた。

「大丈夫……だよ」

優しい声がする。全てを許すような、全てが許されるような、そんな声。
……かつて、僕が殺した人がいた。
彼女は、姉。たった一人の、姉だった。
その時、僕は自分が逸脱した存在だと気付き。
その時、僕は声を失った。
きっと、一生分の言葉を使い果たしたのだろう。
己を呪う怨嗟の叫びと。
止めどなく溢れた謝罪の嘆きで。
全て。
語り尽くしてしまったのだろう――――。

無口な僕と委員長な君
第一章
【僕と委員長の日常】

1―1

「だよねだよねっ」

委員長は、そう嬉しそうな顔で言って、激しく首を上下に振り、長過ぎる三つ編みを振り回して肯定した。

……。

さて、何の話だったか。状況判断。教室、放課後、人はまばら、目の前に委員長……なるほど。僕はまた彼女の話を聞き流してしまっていたらしい。

僕はお喋りである彼女（僕からすれば誰もがお喋りだろうが）の話を聞き流してしまい、しかも適当に頷いてしまうことが度々ある。失礼な奴だと思う。いや、僕の話だけど。

とりあえず―――。

ごめん、聞いていなかった。という意思を伝える。

「また？　メガネくんさ、わたしの話、つまらない？　ナンセンス？」

そんなことない。……ないんだけど、長いんだよ。と、情けない責任逃れを伝える。

「そんなコトないよ。女子なら普通だよ、普通。ノーマルだよ。デフォルトだよ。アベレージだよ」

プンプン、と言う効果音が今にも鳴りそうな拗ね顔を見せてくれる彼女は、このクラス―――二年Ａ組の委員長である。黒髪の純日本人で、由緒ある家柄のご令嬢と聞いたことがある。恐らくは事実だろう。中学生とは思えないような、そんな気品がある。

彼女の容姿で特徴的なのは、黒髪を一本にくくってしまったその三つ編みだ。くくってしまった、などと形容するのは彼女に対し失礼にあたるかもしれないが、しかしそれはもう、背中の下まで届く長さを誇るのである。振り回せば多分、武器になるレベル。……三つ編みを解いたらどれだけの長さになるのか計り知れない。髪の毛、引きずるんだろうな。

そんな彼女は僕の友人だ。友人と言える。友人と言って差し支えないだろう。唯一の友人。そして唯一、会話をする相手だった。……端から見れば、彼女の独り言にしか見えないのが、またややこしい話なのだけど。……と、思考が長すぎるな。今は会話中だ。さすがに聞き流しなど出来ない。僕とて友人は大切なのだ。

しかし僕は、———で、何の話だっけ？　と、結局は話を聞いていなかったというのを認める意図を彼女に発するのだった。あと、アベレージは変じゃない？

「もう。……化学のテスト範囲の話。あの先生、黒板にちらっと書いたこともテストに出すよね、って。あとアベレージはノリだから。ノリ」

ああ……そうかも。あの男、意地悪いものな。———といった感じに肯定の意志を渡す。確かに、あの男。生徒を苦しめて喜んでいるようにしか思えない。あの男の科目だけ、平均点低いし。

「だよねだよねっ」

と、一周してようやく話は繋がった。

「うふー、なんて言うのかな、こういうの。シンパシー？」

英語好きだな、委員長。

「英語っていうか、横文字とかカタカナが好きなんだよ。なんか、カッコよくない？」

……流石、直感派委員長は言うことが凄い。男子中学生みたいな言葉だ。本来ならそれは、僕の台詞だろうに。……ま、台詞なんて、僕にはないけれど。

「……ねぇ、委員長」

……と、僕の感傷に浸る心を通り抜けて、僕と委員長の間に委員長以外の声が割り込んだ。ズレたメガネのピントを合わせる為に、くい、とフレームを上げながら顔を上げると、そこには一人の女子がいた。……さて、誰かな？

制服が委員長と一緒なので同じ学校だろう。

上履きが僕らと同じ色なので同学年だろう。

彼女を委員長と呼称するのだからクラスメイトだろう。

解るのはそれだけだ。僕の優秀極まりない脳味噌は、委員長以外のクラスメイトを記憶に留めておかない。女子は女子。男子は男子。女は女。男は男……。馬鹿も天才も愚図も秀才も非才も鬼才も、僕にとっては一緒くた。必要が無いから、憶えない。憶えたくない。僕のように閉塞した人間には、それは無理というものだから。

だからその女子の外面、つまりはその容姿を描写する必要はないだろう。興味がない。つまりは憶える必要もないのだから。

……しかし、興味はないが、ややこしくなるので便宜的にポニーテールと呼称しようか。女子で、ポニーテール。せめてこの会話の間くらいは、こんな感じの外面性を、僕は彼女に持たせることにした。

「なに？」

晴れやかな、宛ら天使のような笑顔で答える委員長。ポニーテール、略してポニテは、もじもじとしながらも、委員長に切り出した。しかし地味だな、この子。

「い、委員長は……その、“彼”と話しているん、だよ、ね……？」

と、視線の先は言うまでもなく僕。こらこら、そんなケダモノを見るみたいな目で見ないでくれ。僕は受動的な生物なんだから。

「うん、会話してるよ」

笑ってそう返す委員長。ますます混乱するポニテ。

「で、でも……どうやって？」

どうやって。

言葉を話さない僕。言語を介さない僕。コミュニケーションを破棄した僕と――どうやって？　それは当然の疑問だった。不信だと断ずるに値することだ。

さながら魔王が姫と談笑しているようなものだ。理解不能な光景なわけである。……だとすればポニテは勇者か……ああ、そりゃあ唖然ともしよう。

さて――。

委員長。

と、僕はグダグダと余計なことばかりを考えるのを切り替え、意を決して彼女に呼びかけた。

「……？」

委員長は僕に顔を向け直す。それを確認して、僕は続ける。
適当にはぐらかしておいた方が良い。僕はいいとして、委員長の評判が――――。

「……」

と、僕の“言葉”はそこで遮られた。委員長に……睨まれて。いつもニコニコ朗らか天真爛漫天使のような、委員長に。そんなの、止めざるを得ないだろう。
ちょっと、ショッキングだ。

「……ポニ子ちゃん」

「え……な、なに」

ポニテは……もうポニ子でいいか、委員長もそう呼んでいるし。委員長の場合は、憶えていないわけでは当然なくて、ただの愛称なのだろうから、それに倣おう。
ポニ子は、委員長が僕に向けた視線の力強さに驚いたのだろう。先程を上回るビビりようだった。

「わたしね、聞こえるの」

……って。
い、委員長！
それを言ったら――――。

「彼の声が、頭に直接響くのよ」

1―2

「な……」

カチーン、と固まるポニ子。その顔は驚き……というより、ヒいている。

ドン引きだ。ありえないものを見るような、目。委員長が産まれてからきっと、ほんの数回しか受けたことのないような、目線。

「あ、あれ……？」

意味が分からず、事態がつかめないようで、首を可愛く傾げる委員長。だから止めたのに、と僕は呆れつつ、

……あのな、委員長。あんなこと突然言ったらそりゃ、ただの電波さんだよ。

と、事実をそのまま伝えてあげた。

「で、電……？」

電波。電波少女。頭おかしいと、思われてるってこと。

「……」

黙ってしまう委員長。

本人達にとっては純然たる事実でも、それが理解の外である他人には、頭がおかしいと思われても仕方のないことだ。

事実。彼女の頭に、直接僕の言葉が――――意思がそのまま伝わっていることなど、科学の蔓延ったこの二十一世紀。僕と彼女以外の誰がそのまま受け入れようか。

……そう、僕と彼女の間には、二人の間にだけ、通じるモノがある。

シンパシー。テレパシー。言葉無き意思疎通。

世間的に表現すれば、そんな言葉になるだろう。

つまり無口な僕は、超能力者だったのだ。委員長以外にはテレパシーも通じない、脆弱なものだけれど。しかも発信のみだ。おかげで委員長は一人で喋り続ける、とんだ電波さんである。

しかし、委員長にだけテレパシーの波長が合ったことを考えると、その“電波さん”もあながち間違いでもないかもしれない。

委員長から、電波さんへ。

日常から非日常への、激しすぎるパラダイムシフトである。

と、冗談はさておき。

清廉潔白純真無垢にして、クラスメイトからの信頼も厚く人柄も良い彼女の評判、評価を貶めるようなことは、避けたい。それは嫌だ。曲がりなりにも友人として……そんな事は許容できるはずがない。他の誰も、家族でさえも受け取れなかった僕の言葉を受け取ってくれた、彼女を、そんな目に遭わせるなんて———堪えられない。

委員長と友好関係になってから約一週間。初の第三者による介入である。ここを上手く乗りきれば、今後の委員長も安泰だろう。

とりあえず、電波さんだって疑いは、消さないと。……それには証明が必要だ。“僕と彼女が本当に話しているという証明”が———。

まず僕は、教室を見渡した。今は放課後だ。皆下校してしまったのだろう、都合良く残っているのは僕ら三人だけだった。もしかしたら、ポニ子が気を使って、人のいなくなるのを待っていたのかもしれない。……さて次は、

———委員長。

そう、頭の中で呼び掛けると、彼女は視線をこちらに向けてくれた。こんな時でも、どんな時でも、こんな僕でも、どんな誰でも、その声に応えてくれる。それに報いる為に、僕は続けた。

――――委員長、今から僕の“言葉”を復唱してくれ。誤解を解くよう、頑張ってみるから。

「……」

委員長は、何時の間にか目尻に少しの水分を滲ませながら頷いた。電波さん扱い、割りと堪えたらしい。

さて、作戦を始めよう。伝達に必要な時間は十分の一秒以下――――つまりほぼ零。今から僕と君は、完全に同一だ。

「……ポニ子」

と、委員長の口からその呼び名は出た。僕が考えた通り、ぶっきらぼうな呼び方で。

「え……いい委員長！？」

いきなり呼び捨て（いや愛称だけど）されたせいか、さらにビビっているポニーテールのクラスメイト。……多分、今の彼女の頭の中には、関わるんじゃなかったという言葉で埋め尽くされていることだろう。なんたって、委員長が、電波さんだったのだ。予想外にも、程がある。

「……初めまして、と言うべきかもな。クラスメイトだけれど、“会話”は初めてだ。

初めまして」

と、僕は委員長の言葉に合わせて頭を下げた。言葉使いが気に障ったのか、委員長が少しむっとした目で見つめてくる。……僕はシャイなんだ。ぶっきらぼうなのは見逃してくれ。

「え……えええ！？」

「……さっき委員長が言ったことは本当だ。今僕は、委員長に僕の“言葉”を喋って貰っている」

驚き慄きビビりまくるポニ子に、僕はとりあえず、ありのままの事実を伝えてみる。

「う……嘘……い、一発芸？」

……うん。まあ、普通の反応か。ちょっと飛んだ発想だけれど。

「……芸じゃあない。事実だよ。信じられないと言うのなら、今から証明して見せよう」

と、委員長の言葉と同じタイミング（当たり前だ。僕の言葉でもあるのだから）で、一枚の紙を渡す。先程配られたプリントである。

「え……？　新入生歓迎会……？　やっぱり一発芸！？　新手の腹話術！？」

「……違うから。

裏。裏の白紙に何かを書いて、委員長に見せずに僕にだけ……僕だよ、僕。メガネをかけた男子中学生である僕にだけ見せてくれ。それを、委員長に僕が伝えて（テレパシーし）、委員長が読み上げるから。

……あー、なるほどメガネくん。そーいうことかぁ……え？　黙ってろ？　うう……」

ごめん委員長。今は邪魔しないでくれ。

「え……えと……」

「委員長が嘘を吐いてないってことの証明だよ。手品染みてるけど、僕たちは今、突然話しかけられて、何の準備もできない状態だ。タネも仕掛けもないってことはわかるだろ？　そのプリントを疑うのなら、別の紙をそっちで用意してもらっても良い」

「わ、わかった……。

……。

……えっと」

「どうした？」

「ボケるとこ？」

「真面目に」

結構面白い子だな。地味な印象なのに。

「う、うん……」

胸のポッケからシャープペンシルを取り出して、さらさらと何か文字を書き始めるポニ子。委員長には僕の脳内指示で机にふせっている。こう、腕で覆うように。

「書いたよ」

「ん、じゃあ見せてくれ。僕にな」

プリントを返してもらい、その裏に書かれている字……というか文を眺めた。

……おい、これは。

「おいおいなんだこれは……え、まって、何書いたのポニ子ちゃん！？」

その通りだ、と僕が視線を向けるとポニ子は、

「えっと……証拠、なら、普段絶対委員長が言わないことが良いかなって……思ったんだけど」

そう答えた。……成程、理にかなってはいるな。しかし彼女、もう半分以上信じてて（ここまでのやりとりを見ていたのだからしょうがないが）、少し楽しんではいやしないか……？　まあ、いいか。僕は納得して頷き、委員長にその文を伝えた。当然、口には出さず。

「……え？　言うの？　……これを？」

イエス。恥ずかしいだろうが、頑張れ。幸い今は教室に人もいない。

「そうだけど……いや、メガネくんがわたしの為に考えてくれたものだもんね。わたし読むよ」

よっしゃ、やったれ。

「な……」

「なまむになまもめなまにゃまごっっっ！！！！」

「……」

「……」

黙る二人。顔真っ赤にした委員長と、あんまりにあんまりな結果に閉口したポニ子である。僕は言うまでもない。

委員長、早口言葉は三回だぜ？

「……っ！」

「なまむになまもめなまにゃまごっ！　なまむになまもめにゃまにゃまごっ！！　にゃまむににゃまもめにゃまにゃまごーーーっ！！！！」

叫んだ。やけくそである。

始業式の事だ。

新しいクラス、新しいクラスメイトが揃うその日には、当然のように自己紹介の時間があり、恐らく、一年生の頃か小学生の頃か、委員長と同じクラスだったであろうある女子が、委員長の自己紹介の時こういった。

「委員長、早口言葉やってよ」

と。……つか、前から委員長だったってことか。いや、まあ、それは今は置いといて。

……まあ、言われて、やらないような性格の持ち主ではありえなかった彼女は、そのクラスメイトに言われるままにしたのである。早口言葉を。

その結果は言うまでもないだろう———。それ以降、このクラスで委員長に「早口言葉」は禁句となった。そのクラスメイトも、あまりの噛みっぷりにそれ以降は口にしなくなったという。さっきの結果を見るに、多分どんどん悪化している。

……で、こういうわけだ。

確かに、進んで委員長は言わない言葉だろうし、アイコンタクトだか何だかで伝えられる言葉でもない。これで、証明できたはずだ。最良とはいえないけど。

「こ、これで……わかって、くれたよね……？　ポニ子ちゃん……」

「う、うん……」

ポニ子、これには頷かざるを得ない……！　自分でやらせておきながら、やっちまったという感じだった。

「あ、ありがとう……うう……」

再び涙目になる委員長———まあ、三回は言わなくてもよかったかもな。早口言葉って指定じゃないし。

「メガネ君っ！？」

……とまあ、こんな次第で。

ポニ子と委員長、ついでに僕は、和解して。委員長を橋渡しに、たまに会話する程度には、なったのである。

幕間（今までの誰かとこれからの誰か）（前書き）

また登場人物紹介です

幕間（今までの誰かとこれからの誰か）

語り部（僕）
・語らない語り部。
・超能力少年。
・テレパシーが使える（ただし委員長に限る）。
・友達少ない。
・髪は真っ黒で短い。

委員長（君）
・友達兼通訳。
・電波ちゃん疑惑。
・テレパシー受信側。
・友達多い。
・早口言葉が壊滅的に不得手。

ポニ子
・モブ→友達。
・結構腹黒？。
・やっぱり地味。
・ボケたがり。
・わりと優等生。

先輩
・謎の三年生。
・にやにや。
・茶色のさらさらヘアー。
・姓は三宅（みやけ）。

・名は冷哉(れいや)。

僕は君を“委員長”と呼び、君は僕を“メガネ君”と呼ぶ。
僕と君は彼女を“ポニ子”と呼ぶ。理由は言うまでもない。
先輩の名前は実は三宅冷哉と言う。覚える必要はない。
以上。
以下、本編へ続く。

二章（広がっていく関係性）

平凡な日々。多少人と違うことあれど、それは僕にとっては平凡な日々だった。

おはようから始まり、いただきますを経てまた明日、と終わる。ルーチンワークのような、しかし掛け替えのない日々。平和の大切さは失ってから身に染みるものだ――――なんて言うけれど、僕はもう、それを経験していた。

だからだと思う。

だから、こんなにも世界が愛おしく感じられるんだ。

絶望の中では苦痛でしかなかったはずの、この世界が。

世界とは関係だ。知り合えば広がり、別れれば縮んでしまう。

一度僕の世界は断絶して、君との出会いで、再び広がってきている。

これはそんな、世界が広がる話。

無口な僕と委員長な君

第二章

【広がっていく関係性】

2―1

僕の一日は、「おはよう」という言葉で始まる。それは大抵の人間には当然で、一種の人間には叶わない日常だ。

僕は朝早くに起きて、浅い眠気を窓から漏れ入る太陽光で完全に振り切った。僕の夢見は非常に悪い。視るのは常に過去の映像だ。網膜に焼きついた幸福と地獄だ。

幸せな思い出は、時に心を鉄の塊で殴られるかのような痛みをもたらす。……失われた残響なんて悲しいだけで、幸せな記憶は全てが皮肉。

「……」

だから僕の眠りはいつも浅くて、いつも悪い。

白馬のようにまっさらな制服に袖を通して、階下に降りる。リビング、食卓には、僕の父親と母親が既に席についている。朝食の時間は僕に合わせてくれたわけではなく、単に父の仕事の出勤時間が早いだけで、僕はそれに飛び込む形だ。

僕は食卓の席に着きながら、おはよう、と声にならない言葉を発した。当然、声なんか出していない。けれど。

「おはよう」

「はい、おはよう」

二人は当然のように挨拶を返してくれる。もう二年弱にもなるのだ。両親も慣れてしまったのだろう、朝の挨拶は当然のように交わ

された。
　黙々と、両親は二人で会話を繰り広げる中、僕一人黙々と朝食を平らげ、両手を合わせてごちそうさま、と念じる。その動作を見て母は笑い、はいはい、と食器を片づけてくれた。いつも自分で下げようと思うのだが、実行する前に下げられてしまう。母はきっと、少し過保護なのだと思う。
　さて、食事は済ませた。世間一般の中学生の登校時間より三十分は早いが、これも僕の日課として、家族の誰よりも早く出る。これは僕がコミュニケーション不全であることに由来していて、教室に入った瞬間の視線が集まるアレとか、僕の席に誰かが座っていて退くように言うソレとかが嫌なのだ。そもそもいちいち意思疎通が面倒だし、煩わしい。彼らも僕のことは悪く思わないにしろ、良くも思っていないのだし、そんな手間はお互いの為避けるべき……ということだ。
　だから、僕は早く家を出る。その時、僕は空気を決して震わせない言葉で、いってきますと言った。

「いってらっしゃい」
「いってらっしゃい」

　家の奥からの返事を聞いて、僕は安心したような気がして、ドアを閉じた。
　……日差しが強い。まだ四月だというのに、どうにも気温が高い日々だ。そんな中、僕は光を反射する白い衣装を身に纏い、学校への十数分を楽しむのだった。

◇

「ねえ、あなた。最近あの子……」
「ああ……そうだな、あいつ」
「学校に行くのを、楽しんでいるように見える――――」

◇

「おはようっ」

どうやら今日はついている。僕は教室への一歩を踏みしめて、そう思った。
中学生というのは、日直でもなければこんなに早く登校しないものだ。その日直でさえも、不真面目な者だとギリギリに登校してくるだろう。少なくとも僕の一年とちょっとの経験上、そんなものだ。
しかし、例外もいる。まずは僕。見た目は黒髪メガネの地味な中学生な僕である。理由は先ほど述べた通りだ。次にポニ子。理由はまあ、友達付き合いでたまにひょいひょいといる程度だ。そして最後に、当然ながら我がクラスの委員長である。
彼女は毎日朝早くに来て、自分の机で予習、復習をしているのだ。とんでもないガリ勉かと思いきや、彼女、家では全く勉強をしていないらしい。というか、友達付き合いでほとんど家にいないらしい。なので、朝早く学校に来て勉強するのが、日々の日課になったそうだ。
彼女との馴れ初めも、この習慣があってこそありえたわけだが――――まあ、その話は今はいいだろう。
委員長は優等生だ。成績は常に上位で、体育の成績以外は全て「

5」（ちなみにポニ子から聞いた）。運動神経も悪くなく、交友関係は言うまでもない。しかし完璧なわけではない。漫画や小説みたいな完璧は、現実に、まあいることはいるんだろうけれど、とにかく彼女はそうではない。

きちんと努力して、きちんと精進している。だから親近感がわくし、人気があるのだろうと思う。手の届かない天才ではなく、身近な秀才、と言った感じだろうか。

……さて、委員長を表するのはここまでにして、僕が今日はついている、と称したのは、勿論委員長が教室にいたからだ。いや、正確には委員長だけが、教室にいたからだ。僕と委員長が“会話”している光景は、ポニ子の件で解るように、異様そのものである。言葉を一切喋らないはずの僕と、筆談すらせず、見た目には委員長だけがペラペラと喋っている。ポニ子の件で（彼女が少々手を回したらしい）和らいだものの、そんな周囲の奇異の視線を浴びなくても済む……それだけで、十分に喜びに値するのである。

それに何より、彼女との対話は、僕にとって最も嬉しいものだ。僕の意思をくみ取って言葉を返してくれる両親には悪いが、彼女とのそれには遠く及ばないと言わざるを得ない。僕が朝早く登校する理由には、きっとそれも含まれている。

そんな僕は、この日常に感謝しつつ、彼女の声にテレパシーで応えて、彼女の席の前の椅子に座るのだった。

この後の、僕と委員長の仲睦まじい会話は語る必要のないことだ。

それは日常だし、放課後とは違い元気な僕は、朝ならば委員長の数々の話題にキチンと応え、その会話は書き表すには膨大な量になるからだ。

そしてその後の授業にも特筆語ることはない。化学の教員はいつも通りいやらしかったし、他の教師は僕にあてることもないし。放課後の委員長とのポニ子を交えての交流も同様だ。

問題は、放課後。

そう、それは放課後の事だった。

そいつと、出逢った。
日常ではない、出来事。
それを語ろう。

2―2

「……」

僕は無言で、帰路に付いていた。そも一人なのだから、無言であってしかるべきなのだが――そこは僕の個性とするところ。しっかりと自覚しなければならない。

個性とは、そのまま自己の性格、ひいては人生だと僕は推論する。全ては、個性で始まり、個性で終わるのだと。

極論染みた考えだが、気まぐれに委員長に伝えてみると、「わかるかもしれない」と言ってくれた。勿論、優しい彼女の事だ。僕を慮っての方便かもしれない。……が、そんなもの、他のどんな会話にだって言えることで、そんなありきたりを態々深く思考するのは馬鹿馬鹿しい。戯れ言にしかなりえない――と、思う。だからそんな議論は無意味で、ただ疑心暗鬼に陥るというマイナスしか持たない悪意だ。

さて、話がそれてしまったが、帰路である。

僕にとっての日常――そのルーチンは、朝起きて、両親と挨拶を交わし、朝食を慎ましく摂って早めに家を出て、徒歩で学校へ行きたまにポニ子も交えて委員長と談笑し、今日の時間割の予習を軽くして、授業を受け、給食を食べて、放課後に少し委員長やポニ子と駄弁ったのち、一人で寂しく下校する――そういったものだ。それが委員長と出逢って二週間。ポニ子と出逢って一週間のルーチンである。

だから下校中に、誰かに話しかけられるなんてことは、僕のルーチンにはない。まずありえない。……だというのに。

「よおっ、後輩君！」

三年生の、男だった。
服装は僕と同じ白い学ラン。しかし着こなしは正反対で、僕はきっちり、彼はぐったりといった感じだ。しかしこれは彼がおかしいわけでは決してなく、僕が男子中学生らしからぬ生真面目な着方をしているだけの話である。相対的に見れば彼はだらしがないが、そう見なければ別に普通だ。
しかしその明るい茶髪はどうだろうか。うちは中学だし、当然のように染髪は禁止だ。なのに――――いや、よくよく見ればあれは地毛だ。根本も、眉も、全て見事なまでに綺麗な赤茶色である。顔もよくよく見れば整っていて、欧米人よりの顔つきだった。
つまり、イケメンだ。平凡凡庸、しかも目付きが少々悪い僕とはかけ離れた存在である。そんな男が、何やらニヤニヤと僕を見て笑っている。……ちょっと不快な気分だ。

「おっ、こっち向いたな！　なんだ全く喋らず非交渉的だと聞いていたけど、ちゃんと反応してくれるじゃないか！」

訂正、かなり不快。初対面で非常に馴れ馴れしい。あの委員長だって、最初はおっかなびっくり敬語口調で今思えば可愛いとしか言いようがない有り様だったというのに。
彼はなんというか、興味本意だというのが透けて見えるようだった。どうせ、僕の特異性を聞き付けて見物に来た類いだろう。
それは別に構わない。僕自身が変わっていることは当然否定しないし、僕の天女菩薩の如く優しい友人である委員長に迷惑さえかからなければ、僕に向けられる奇異の視線などネタ無しシャリ無しのわさびだけの寿司の如く無意味さだ。ちょっと辛いだけである。
とか、それこそ無意味な長い思考を経て、ようやく眼前の男を注視すると、待ってましたと言わんばかりに彼は自己紹介を始めた。

「初めまして噂の後輩君！　俺の名前は――――」

名前を適当に聞き流しつつ、僕は思う。僕が喋れないとわかってこんなに積極的にコミュニケーションを取ろうとする、そんな人は初めてだ、と。経験上、一言二言話しかけて、本当に返事をしない、等と笑って逃げるように去っていくというのに。まだまだ話を続けるようなてい である。

ちなみに委員長は当然例外だ。彼女は僕を差別なんかしないし、そもそも最初から“話せたし”。

……まあ、それは兎も角、だ。名乗られたからには名乗り返さねばならないだろう。礼儀として。一応僕の方が後輩なのだし。僕はこれでも礼儀正しいのだ。積極的にコミュニケーションを取らないのと、一切喋らないので無礼に見られがちだが。

僕はポケットからメモ帳を取りだして――――これは委員長と話すとき以外は必須の品だ。携帯の方が便利だろうが、僕の通う中学はイマドキ携帯禁止である――――胸元からはペンを取りだし、サラサラと挨拶と名前、そして最後に「何か用ですか？」と書き、にやける先輩に突きつけた。態度で僕の不快さは存分に伝わろうというものだ。

「おお！　筆談か成程な！」

更に笑う先輩……駄目だ全然伝わってねえ。

ずっとにやにやしやがって……名前を踏まえて、にやけ先輩と呼んでやろう。脳内で。

「……ああ、用だったね！　実はクラスの女子が君を噂しているのを聞いてね！　こりゃあ面白いぞと。そして思い出したんだよ、君ってさ――――」

そうしてこいつは。
少しもったいぶるように溜めて。
僕の名の前に、「超能力少年」と。
つけて、呼んだ。
それは。
耳が腐る程聞き飽きて。
酷く傷を抉られるコトバ。

「……！」

「うべっ！？」

気がついたら、殴っていた。
頭に、血が上ったのだろう。脳味噌は真っさらで、何も考えることができない。
ああ、怒ったことなんて、この二年弱無かったけれど――――こんな、感覚だったっけ。忘れてた……こんなはっきり、ストレートに、単刀直入に、ざっくりと傷口を抉る奴なんか、いなかったし。
冷静になれ――――冷静に……落ち着け、僕。僕、らしくもない。
……ああそうだ、やばい、こんなことをしたら、問題になってしまうじゃないか。全く、単に……昔の呼び名で呼ばれた位で、取り乱すなんて……僕も精神修行が足りない。これじゃあまるで若さ溢れるキレやすい、思春期男子中学生のようだ。……いやそうなんだけれど、僕自身はもうちょっと大人びているつもりだった。
もっと冷静で、冷徹で、人間離れしているつもりだった。
いくら逃げても……僕も所詮、人間ということか。
……。
僕は倒れこんでしまった彼に、手を差し伸べて、謝らなければならない……なにより、暴力は醜いものだ。
暴力は嫌いだ。

暴力は全てを破壊する。
それが人智を超えたモノであれば、なおさら。
……僕はとりあえず、手を差し伸べようとした、しかし、
「拳、か……ふんふん、ほんとーにもう超能力はないんだねえ……」
……そいつは殴られたことを気にもしないように、いやむしろ、それさえも嫌悪でなく興味の対象であるかのようにニコニコと笑って見せた。それを見て、助ける気が失せる僕。
なんなんだ、こいつ――――。
「いや、悪かった！　気分を害したらしいね！　悪気はないんだ！　許してくれ後輩君！」
快活に笑いながら、そう言って自力で立ち上がる先輩。……やばい、相当な変人だ、この人……。
「いや、俺はね、超能力とか、宇宙人とか、幽霊とか、そういうのが大好きでね！　君が出演していた番組もよく見ていたよ！　世間ではヤラセなんて言われていたけど、俺には解る！　あれは本物だろう！？」
……僕が怒ったのを見て、まだ“過去”の話をするのか。……呆れて怒りも失せた。
とりあえず、殴ってしまった負い目もあるし、話はしてみよう、か。
メモ帳を取り出し、「解りました。話がしたいんですね？　なら、どこかに入りましょう。こんな道端じゃあ、筆談もし辛い」と、結構な長文を書き連ね、にやけ先輩に見せると、先輩は心底嬉しそうに、ニカッと笑顔を深くした。

「おお！　ではそこのファミレスに！　奢るよ！」

当たり前だ、畜生め。

と脳内で悪態を吐いて、実際は溜め息を吐く僕。……今日は、ついてない日に変更だな。

2―3

とある超能力少年の話をしよう。
あるところに、超能力が使える小学生がいた。
彼は幼少の頃から思うだけで言葉が通じ、念ずるだけで物が動き、視るだけで世界が解り、喋るだけで常識が変わる……そんな凄まじい超能力少年だった。
そんな強大な力は隠しきれないモノ。いずれ世間に露呈し、やがてカルトな雑誌を騒がせ、そしてテレビでオカルトブームを巻き起こした。
その頃の少年は自分が特別だと感じていて、何でもできる、何でも叶うと信じこみ、歪な世間に自ら呑まれていった。
大人しく誠実だった性格は、勧められるままに快活で、超然的などどこか見下すような“キャラ”になり、そしてそれは本当になっていった。
父は僕を叱った――――うるさかった。
母は僕を嘆いた――――訳がわからなかった。
姉は、僕を――――……。
ああ、世界はなんて簡単なんだと思った。願えば叶う、子供のワガママみたいなセカイだと。
……そうとも、僕は愚かだった。
いくらありえない才能があろうと。
いくら数えきれない異能があろうと。
僕は、家族をないがしろにするべきでは無かった。
何が子供のワガママみたいなセカイだ。
本当に、ただの、くだらない、小さなガキの、ワガママだったのに。
……それに気づくのは、遅すぎて。
僕は能力（チカラ）を失って。

僕は言葉（コトバ）を失って。
僕は全て（ジブン）を失った。
それが、愚かで子供だった、超能力少年の末路である――――。

◇

「先輩、まずはさっき殴ったこと、謝ります。すいませんでした」と、我ながら慣れた手つきでメモに書きつつ、僕は頭を下げた。
それに予想通り、笑顔で構わないよと答えるにやけ先輩。先輩は中学生のくせにファミレスに通い慣れてるようで（僕は友達が少なく家族は内食派なので慣れていない）、大分リラックスした面持ちで座ったまま上着を脱いだ。
すると中から出てきたのは当然学校指定のYシャツだ。それは普通なことこの上ないが、薄着になると、先輩の身体は随分筋肉質に見えた。
鍛えられているというか、運動部なのだろう。と、そこで違和感に気付く僕。
……この人、僕のひ弱な拳くらい、避けられたのではないだろうか。
部活には、特に運動部には縁遠い僕の、喧嘩なんかしたこともない力任せのぶん殴り。避けるのは無理だとしても、身構えて踏ん張ったり、受け止めたりくらい出来ないとおかしくないだろうか。
……まさか、と僕は推論を巡らせる。もしかしてこの先輩は、僕が怒っているのを見て、わざと殴られたのではないか。僕の怒りを発散させ、負い目を抱かせ、この状況に持ち込む為に。
彼は超能力のような“おかしなもの”に興味があると言った。そ

の知的好奇心がここまでさせるのだとしたら――――。

「ん？　難しい顔をして、どうかしたかい？」

――――面白い。

人に対して無関心で、関係に関して無感動で、世界について無関係だった僕は、そんな感想をこの男に抱いた。

委員長の時にも似たような感情が湧いたような気がする。

全てを見透かしていた過去の僕が、知らない人種だからだろうか。彼も……委員長も。いや、全て見透かすなんて、酷い傲慢だ。きっと、あの頃の僕は、現在の僕だって、世界の一欠片さえ理解できてはいないだろうに。

「あ！　注文に困っているのかい？　遠慮はいらないよ、俺だって先輩だ！　バシバシ注文するといい！」

等と、勘違いを飛ばす先輩を見て思考を中断した僕は、メニューの上に並ぶまあ煌びやかな写真と文字列の中から、適当にケーキセットを指さす。ビターなチョコレートのケーキと、甘めのカフェオレの格安セットである。

「ん？　それでいいのかい？　遠慮はほんとに要らないよ？　俺の実家は商店やっていてね、その手伝いでお小遣いは多くもらえているんだからお金にはまあ困っていないんだよ」

そんな興味もない情報を提供してくれた先輩に、僕は筆記で「いえ。母が夕食を作ってくれているので」と簡潔かつ、正直に返答した。

「そうかー……わかった！　じゃあ店員さん呼ぶね！」

僕の返事に納得して、丸みを帯びた物体――――呼び鈴を押して、店員を呼ぶ先輩。ほどなく店員はやってきて、先輩は自分の注文と、ついでに僕の注文もしてくれた。ありがたい。

「さて……ついてきてくれたってことは、少しは話をしてもらえるってことで、いいのかい？」

……そして、ようやく興奮し荒げたような声を落ち着かせて、少し低い、真剣さを感じさせる声色で、にやけ先輩はようやく本題を切り出した。僕はそれに、首肯で答えつつ、「でも、答えたくないことには答えません」とメモ帳に書き並べる。

先輩はそれにうんうんと頷きつつ、こんな提案を掲げてきた。

「とりあえずさ、俺の知ってる、引いては世間一般に知られていることを簡単にまとめて喋るから、聞いてくれないかな？　事実確認として、さ」

事実確認……あの事件が、僕という存在が、世間から見てどうであったか……か。

そう、だな……僕は、それをきっと、良くは知らない。良くない話は両親がカットしていただろうし、非コミュニケーション的な僕が、誰かにその話を聞くこともなかった。それに、今日まで僕が、この僕があの“超能力少年”だと気付くことなんてなかったのだ。

それも当然だ、と僕は思う。自分で鏡を見て、その違いに驚愕するくらいだ。目はもっと希望に満ちていたし、表情は自信ありげだった。当時は眼鏡だってかけてやいないし、髪型も当時とは違う。今はそのまま、何もいじらず前髪を下ろしているが、あの頃は見栄えを良くするために前髪をかき上げていた。

名前がいくら同じでも、こんな根暗で不気味な中学生と、活発で

人気な小学生が同一人物だなんて、気付くはずがない。名字は隠していたし、名前もカタカナ表記だったのもあるだろう。

ともかくも、僕は他人から見た自分を知らないし、しかしそれを知りたいとも思っていた。いや、そう思っている自分に、今気がついた。

だから僕は、多少の躊躇いのあと、再び首肯を見せた。それに先輩は頷き返し、では、と前置きをしてから話し始める。

世にも奇妙な、超能力少年の話を。

2―4

「とはいえ、俺が知っているのは所詮世間一般プラスアルファくらいなものさ。当時は俺も小学生、調べる能力なんて高くはなかった。勿論、テレビにかじりついていたし、ネットでも調べたけどね……それらが真実とは限らないことくらい、俺だって知っていた」

そう言って、先輩は語り始めた。ブーム以前のカルト雑誌時代から、ブーム最中のテレビ時代までを。それはとても詳細的で、解りやすくまとめられた話だった。……本当に、ファンだったんだな、と感心する僕。ちょっと恥ずかしくもある。

その語る姿は真剣そのもので、しかし楽しそうで……忘れられそうにない映像だった。

僕らしくもない感傷だ。

永遠に無関心で、永久に無感動で、悠久に無関係だと――――思って、いたのに。

話を聞いて、僕の歴史を聞いて、思い出して、思い出したくなくて、感慨に浸るように記憶の闇に沈んでいく。

僕は、変わったんだろうか。

僕は、変われたんだろうか。

僕は、変わってしまったんだろうか――――。

先輩の知らない僕の歴史で、変化したのだろうか。

委員長と出会って、話して、久しぶりに感情らしきものに触れた。

ポニ子に絡まれて、説明して、久しぶりに楽しいと自覚した。

そして今――――確かに、僕には感情が湧いている。怒りも、照れも、関心も……今まで、二年弱前から今まで、忘れてしまうほど無かったというのに。

それはきっと、やっぱり委員長のおかげだと思う。今の僕は、彼女に作られたと言っても過言ではない。

他人の優しい心に触れて、僕は、僕の氷河のように冷徹な心は、優しく溶かされたのだ。

「――――それで、最後にあの話だね。君が引退……と言って良いのか、わからないけど……あの日だ。

あの日、レギュラー化していた番組に出た後、君は全くメディアに出なくなってしまった。確かにあの日の放送は荒れていたけど、全くスッパリ出演が無くなったのはどう考えてもおかしい。

……色々な噂が出回った。どうやら無数にあったその中の、“超能力を信じる派”最有力の噂が……正解だったみたいだね。……君は超能力を失った、そうだろう？

俺の記憶では確か、念話も出来たはずだ……たとえ相手が誰でも、自在にやってみせた筈だ。筆談で思い至って、あのパンチで確信したよ。君は念動力だって使えていたしね」

言葉が頭に驚く程入ってくる。彼の考察は正しい。当時の僕は何でも出来たのだ。念動力（テレキネシス）も、念話（テレパシー）も、僕は完璧に使いこなせていた。それが今では不完全なテレパシーだけだ。それだって、委員長に会うまで無くなったと思っていた。

……ああ、そう言えば、そのことをにやけ先輩は知らないのか。いけ好かない容姿と性格だが、悪い奴ではないし、今までの話を聞く限り僕に悪意も敵意もない。信用に値するし、これくらい話してみてもいいかもしれない。

信用……か。

本当に、僕らしくもない――――。

「でもその説が正しかったとすると、謎が二つあるんだよね。

一つはほら、“ゼロ”。彼もあの後間もなく消えたけど、何があったか知らないかい？」

僕は知らないと首を横に振って返答する。“ゼロ”……懐かしい名前だ。本名は……やっぱり忘れてしまったけれど。

「そうか……残念だ。

……そしてもう一つ。……これは、込み入った話だから、気分を悪くしたら、止めてくれ」

そう前置きをする先輩。……そこで、嫌な予感がした。その話は聞きたくないと、脳が内から叫んでいるような。

――警告。それを聞けば、僕は直視せざるを得なくなる――。

そんなアラートが、鳴り響いて、僕はそれに従うままで、制止の言葉を記そうとしたけれど、その動きは石になったように緩慢で、当然のように先輩の言葉のほうが早くて。

そして先輩は、本日二回目の、失言をした。

「あの日――君がメディアから消えた日、“あること”があったって、ネットにある噂が流れていたんだ。

……それは」

ズキン、と。

一瞬、頭が、酷く痛んだ。深く、深くに沈んだ、目をそむけていたそれに、照準を合わせて、

「君の姉が――」

……ぎり。

「――、」

話が止まった。
……ぎりぎり。

「……？」

先輩は驚いた顔をしている
……ぎりぎりぎりぎり。

「な、なあ……」

ああ、何の音かと思ったら。
……ぎりぎりぎりぎりぎりぎりぎりぎりぎりぎりぎりぎり……！

「……っ」

僕が、歯を食い縛っている音か———。

「……もう、やめようか」

……。

「また、怒らせてしまったみたいだし……無理をすることはない」

……違う。
怒った訳じゃない。ただ……僕が愚かにも忘れていただけだ。その事実に愕然とし、思考停止に陥っていただけである。
ポニ子と、先輩と……委員長との対話で、失念していた。逃げていた。目を背けていた。
いくら逃げても、僕は人間だ。

直視しろ。僕は逸脱した人間だ。
直視しろ。僕は人間からは逸脱してはいない。
……そんなことは出来ないし、してはいけないんだ。
僕は弟なのだから。あの人の、弟なのだから。
誰よりも人間で、誰よりも家族で、誰よりも姉だったあの人の、弟だから。
逃げるな、逃げるな、逃げるな……！
僕から、超能力を暴走させた僕から逃げなかったあの人の弟が、こんなところで逃げるな……！

「……！」

僕の書いた文字を見て、先輩は伝票を持って、今にも立ち上がらんとしていた腰を再び落ち着ける。「待って」。そう一言、僕らしくもなく、もはや僕らしさなんてわからないまま書いた一言が、彼をここに繋ぎ止めた。
止めてどうするのか？　何を語るつもりなのか？　それはおかしな行為ではないのか？　……停滞した僕はそう叫ぶ。
そうとも、彼は今日ちょっと知り合って、ちょっと変人で、ちょっと興味が湧いただけの他人だ。そこまで語る必要はない。そもそも、会話を続けることを彼自身が遠慮している。――――だが。
姉の名を出されて、そのまま何もしないなんてことは、今の僕にはできない。だから、「一つだけ教えてあげますよ」そうメモに書きだして、次のページに、「でも聞いた限り、貴方は超能力少年だった僕の殆んど全てを知っている」。さらに、次のページ。「それでも、わざわざ不安定で不明確で不審極まりない僕から、聞きますか？」。そこまで書いて、メモ帳から視線を上げて、先輩の顔を見た。
顔は、やっぱりというか、真剣で、誠実で、この時ばかりはにやけ先輩なんて呼べないくらいに完璧なまでの、イケメンだった。

「ああ――――ああ！　勿論だ。この世の全ての情報も、ネットに蔓延るあらゆる噂も、大ファンだった、今でも大ファンな、俺のヒーローの言葉の前では全てが無意味で、君の言葉こそが、真実だ……！
だから俺は君の話を聞いて、いてもたってもいられなくて……さっきも今も、とんだ失言をしてしまって……でも、そんな俺だけど、俺だから、君の話を、この世界で唯一の真実を、聞きたい――――」

……いい、言葉だ。照れる、それに恥ずかしくもなる。その瞳は純粋で、どこまでも透き通っていて、まるで本当に憧れのヒーローを見る子供のようで――――だから、僕はステージに立ったヒーローショーの主役のように、それに応えたいと思った。
そうして僕は、彼の話を補完するように、僕しか知らない真実を、メモ帳にスラスラズラズラと実に三十枚は消費して、語りつくした。
子供に聞かせるには酷く醜い、僕の傷の物語を。
それはきっと、半分は彼に話してあげるということもあるけれど、もう半分は、僕が向き直って、直視するための、懺悔の時間だ――――。

2―5

翌日、僕はルーチンに従うままに、朝早くに登校してきていた。教室を覗き込むと、今日も委員長一人きり。僕は喜びつつも、軽い足取りで自分の席に向かう。委員長はそんな僕に気付き、勉強の手を止め、全身を使ってブンブンと手を振ってくれた。それに応じてひゅんひゅん暴れる床すれすれの三つ網が動物チックでちょっと和む。

そんな可愛い委員長に、僕はおはよう、と念じて挨拶した。

「うんっ、おっはよう、メガネくん！　今日も早いねえ」

委員長もね。たまにはゆっくり眠って、ゆっくり登校すればいいのに。と僕は答えてみた。しかし委員長は首を横に降る。

「いやぁー、勉強しなくちゃだし、ね」

委員長は、成績は悪くないどころか良いのに、そんなことを言う。いや、やっぱりあの成績は努力の賜物だと言うことか。

しかし僕はめげずに、ならばとばかりに提案をする。朝の勉強の原因である友達付き合いを減らしたらどうか、というものだ。まあ、答えはわかりきっているけど。

「い、イヤだよっ。それは哀しいじゃん」

だろうね。と予想通りの返答に頷いて、僕はちょっと悩んでから、僕だって委員長との付き合いが無くなったら嫌だし、わかるよ。――と、言葉を続けた。

すると委員長は、へ、と口をポカンと開けて、目を見開いて驚き

を表しつつ、頬をやんわり染めて、

「な……なんか、今日は積極的だねメガネくん。何かあった？」

なんて、言ってくれるのだった。僕はそんな様子が可笑しくて、ついつい笑ってしまう。

そんな僕を見て、今度は照れ抜きの純粋な驚きを見せる委員長。

「メガネくんが、笑った……」

僕だって笑うよ。ただ、委員長の前では恥ずかしくて我慢してるだけで。

「そっかー……でもメガネくん、笑顔の方がいいよっ。わたし、その方が……好きだな」

そう言った委員長は、どこか物憂げで、懐かしむようで……僕はそれを見て、頷く以外の選択肢を選べなかった。

わかった……なるべく、笑うようにするよ。と、そんな台詞を付け加えて。

「うん、ヨロシクっ。いやぁー久々に見たなぁ、メガネくんの笑顔っ。嬉しいなぁ、わたし」

大変喜んでくれる委員長。はて、久しぶり？　僕の気づかないところで、僕の笑顔を見たことがこの一月弱の間にあったのだろうか？　……あ、いや、一年の頃とかもありえるのか。そんな疑問を委員長に聞いてみるて、眩しすぎる笑顔で「ひみつっ」と言われてしまった。……ま、いっか。僕の笑顔なんて、大したもんじゃない。この笑顔の前では尚更だ。

それを実直に伝えるために、委員長も笑顔が一番似合うよ、と伝える僕。今度は真っ赤になる委員長。それを見て再び笑うと、

「……そういう笑顔は、控えて欲しいなぁ」

なんて、苦言を貰ってしまった。

「やっぱり今日のメガネくんは変だなぁ。ホント、何かあったの？」

……ちょっとね。見方が変わっただけだよ。委員長のおかげかな。

「えぇ？　何で？」

秘密。

「む、意趣返し……今日は意地悪でもあるね。化学の先生みたい」

一緒にするなよ、僕は委員長しかからかわないんだから。

「そ……それはどうなの……？」

困惑する委員長を見て、僕は三度笑顔を溢した。

昨日———先輩に全てを話して、先輩はしっかりと受け止めてくれた。それで、楽になったりしたわけじゃないけれど、自分を見直すきっかけになった。

委員長と出会って変わった自分を、だ。

僕はもう自閉的で不自由で無関係な僕では無くて、そんな籠にこもっていたのは過去の話になっていた。それは、委員長がそこから引っ張り出してくれたからで、僕は彼女に感謝してもしきれないと思っている。

それを伝えれば、君の重みになるから、伝えないけれど。
でも。
これだけは言っておきたいんだ。
……委員長。

「な、なに……？　また何かからかおうっていうのかな！？　もうわたしも大丈夫なんだからね！　くさい台詞耐性はつけました！　パーフェクトなディフェンスなんだから！」

――――ありがとう。

「……え？　な、なにが……？」

君にはきっとわからないけど、僕は君に感謝しているんだ、委員長。素直に受け取ってくれると、嬉しい。

「んー……？」

僕の言葉に首を傾げる委員長。しかし、疑問符に満ちたその表情はすぐに引っ込ませ、僕を、僕の目をじっと見始めた。
それは多分、僕の真意を見極めているのだろう。……眼鏡越しに突き刺さるその視線は、僕の思惑を掴めるとは思わなかったけれど。
委員長はしばらくそうやって僕の目を見つめていたが、やがて諦めるように視線を外して、

「……ふむぅ、とりあえず、真剣みたいだね」

と笑って、

「んじゃあ、どういたしましてっ」

そうやって、僕の感謝を受け止めてくれた。良くわからないのに、受け入れてくれた。……またしても僕はたまらなく言いたくなって、ありがとうと言ってしまう。それに、

「あ、今度はわかるよ？
ノーサンキュー、気にしないでっ。友達でしょ？」

そう、応えてくれた。
友達だから、そんなこと、気にするなと。礼を言うまでもないと、言ってくれた。
……ああ、やっぱり、君は僕を変える人だ。
抱き締められたかのように暖かく、僕を溶かしてくれる人だ。
そんな君と共にいるのだから。
そんな君と友でいられるのだから。
……僕も、頑張らなければならない。

「……？」

姉と、向き合おう。
姉が眠るあの場所へ……丁度今年のゴールデンウィークの最終日が、“あの日”から二年だ。……その日に。
僕は、姉に……お姉ちゃんに、向き合おう。

「……ねえ？」

それが、変わった僕の、これからも変わっていく僕の、ケジメだ。
目を背けるのは……逃げるのは、もうやめよう。
始まりを始めよう。
停滞していた自分を突き動かそう———。

「おーい？　……メガネくんっ！！」

「っ！？」

うわっ！？　耳元で叫ばれた！？

な、なに、委員長……？

「なにじゃないよー、また考え事して話聞いてなかったでしょ？目の前に、わたしがいるんだよ？　物思いにふけるのもいいけどさ、今はわたしとお話してよ」

ご、ごめんごめん……委員長の勉強時間削らせてるのに、悪かった。

「え？　ううん、勉強はもう終わってるよ。そういうことじゃないんだよ」

え？

「……あのねぇメガネくん。さっきわたしは友達と遊べなくなるのは哀しいって言ったけど、それはさ。……メガネくんとだって、話せないと哀しいってことだよ？」

う……。本当にごめん。

「むー……謝られたら許さざるをえないんだよなぁもぅ。

朝からこんな調子なんて、ホントーっに珍しいよ。言いたくないみたいだから、もう何があったか聞かないけどさー。

メガネくんとは付き合いは短いけど、ディープなフレンドだと思

ってたんだけどなー？」

仕返しとばかりに意地悪な委員長。しかしぼろがボロボロ、不自然極まりない。

委員長、顔がにやけているよ。慣れないことはやめたら？　――と、優しく忠告してあげる僕。

「う、うるさいよっ」

あっという間に逆転されて悔しいのか、拗ねたように頬を膨らませる委員長に僕はまた、今度はこっそりと笑うのだった。たぶんこの笑顔は、委員長が見たくない部類だろうから。

……そんな朝を越えて、今回の話は終わる。この後あったことといえば、蛇足か、エピローグか、それは僕にはわからないが――――放課後のことだった。

教室で、委員長と談笑する僕。そこに、

「やあ！　後輩君！」

その男はやってきた。サラサラの茶髪。張り付いたイケメンスマイル。にやけ先輩である。

僕と委員長との蜜月を邪魔しにきやがったこの男は僕ら以外に誰もいない教室に我が物顔で入ってくると、快活に僕に挨拶を飛ばした。

不愉快！　至極！　極まりない！

「うわお！　嫌そうな顔だねえ！　ごめんごめん！　教室まで押し

掛けるつもりはなかったんだけど、いてもたってもいられなくてね！」

……はあ？　と疑惑の視線を先輩に向ける僕。ていうか、委員長の存在は無視かよ。一人状況がつかめずにあわあわおろおろしてるじゃないか。僕に疑問符の雨霰が降ってきそうだぞ。

「いや実は――――」

しかしそんなことは意に介さず。
すすすと僕によってきた先輩は。
多分委員長に聞かせまいという配慮からだろう、耳元に口を寄せてきて。
こう言った。
“ゼロ”――――もう一人の超能力少年が、この学校にやってくる、と。
それだけ言って、先輩は楽しいことになったぞ、と言わんばかりの笑顔と「じゃあね！」を捨て台詞に、さっさと帰ってしまった。
取り残される僕と君。

「んー、なんかよくわからないけど、面白い先輩だねえ」

……そうか？

これはこの話のエピローグ。
もしくは。
ある蛇足の、プロローグ。

幕間（とある先生と生徒達）（前書き）

勿論、また登場人物紹介です。

幕間（とある先生と生徒達）

語り部（生徒）
・僕。
・成績は中の上。
・得意科目は国語。
・元超能力少年。

委員長（生徒）
・君。
・成績は上の上～中。
・得意科目は英語。
・洋菓子より和菓子派。

ポニ子（生徒）
・地味。
・成績は上の下。
・得意科目は社会。
・今回は台詞のみ。

にやけ先輩（生徒）
・イケメン。
・成績は中の中。
・得意科目は理科。
・今回は出番すらなし。

化学の先生（先生）
・やせ形眼鏡。
・評判は下の中。

・担当科目は理科（自称化学）。
・意地悪な先生。
・姓は化野（あだしの）。
・名は学（まなぶ）。

僕は君を“委員長”と呼び、君は僕を“メガネ君”と呼ぶ。僕と君は彼女を“ポニ子”と呼ぶ。
僕は彼を“にやけ先輩”と呼ぶ。ニヤニヤしてるから。
先生の名前は実は化野学と言う。覚えてしまった。
以上。
以下、本編へ続く。

三章（意地悪な先生とウィルス現る）

僕は酷い人間だ。
全てを忘れて、逃げようとしていた、醜い人間だ。
現実からはまず逃げられない。たとえ逃げようと、その脱走者は二度と現実には回帰出来ないだろう。
それは嫌だった。
……僕は本当にゴミのような人間だ。
あんなことをしておいて。
あんな罪を犯しておいて。
……幸福を求めて、現実にしがみついている。
逃げたがっていた筈の現実に、しがみついている。
現実（そこ）には、“君”がいるから。
僕は過去（げんじつ）から逃げたがりながら、現在（げんじつ）を愛していたのだ。
――――でも、そんな矛盾を、変えたいと思った。やっと、そう思えたんだ。
……そんなことを僕が考えていた、僕にとっての転機になるであろうゴールデンウィークの数日前の、ある日のことをお話ししよう。
その前にまず、一人の男の紹介をしておかなければならない。僕は知っての通り人間に対して無関心だったので、名前を覚えている人なんて殆んどいない。ポニ子は勿論、ついこの間名乗られたばかりのにやけ先輩の本名すら失念してしまった。……たしか“にやけ”と何かをかけた気がするのだが……まあ、いいか。そしてそれは委員長とて例外ではなく、僕は彼女の名前を知らない。名字はかろうじて、先生が呼んだ時に聞いているので知っている程度なのだ。
僕は人の個性には惹かれるが、その人を表す“名称”はどうも忘れてしまう。
無関心では無くなった筈の僕が未だに覚えられない理由。それはきっと、僕が無意識に人を遠ざけていたということなのだろう。

そんなものは無いと、少なくとも薄弱だと思っていた、罪悪感故に。
僕は人外の何かではなく、ただの特殊な人だったのだから。
普通に、罪悪感くらい、あったのだ。
……また話がそれてしまった。僕はいつもこうだ。話を戻そう。紹介するべき人間のことである。
彼は僕が先生で唯一名前を憶えている人間だ。たぶん彼の授業を受けた全ての生徒がそうだろう。
名を、化野学（あだしのまなぶ）。担当科目、理科。自称化学。彼は僕が一年生の頃この中学校にやってきた新任で、本来ならもっとも親しみやすいはずの存在だった――――が、彼の最初の授業、こればかりは僕も良く覚えている第一声は、これである。

「おいっすー、初めましてオレの玩具諸君！　オレの名前は化野学だ……こう書く！　担当は今日の一時間目である化学だ。はいここまでで感の良い奴ならわかったろうが、オレが化学の先生になったのは名前がこれだからだ！　かっかっか！　傑作だろぉ？　んじゃよろしくー」

……と、まあ、こんな感じだ。
まず玩具とはどういうことなのか。ていうか化学って。ここは中学校だぞ。しかもそのそれこそ中学生みたいな志望理由はなんなんだ――――という、突っ込みどころのカタマリのような登場だったのだ。
僕が彼の名前を覚えている理由とはそう、名前と個性が直結しているからなわけである。
といった次第で問題教師である彼。そんな彼と、僕はちょっぴり関係性を持っていたりするのだが、それも今は置いといて。
さて、前置きが長くなったが、この話の始まりはその先生と関係なく、ポニ子が風邪で休んだある日から始まるのだった。

無口な僕と委員長な君

第三章

【意地悪な先生とウィルス現る】

3―1

……風邪？　ポニ子が？

「そう、今朝メール来ててさぁ。ほら、化学……あ、じゃない、理科の授業あるから、ノートのお願いを、ね」

ふーん。と軽い感じで、心配そうに顔を曇らせた委員長を一瞥し、僕は思考を開始する。

ポニ子。本名不明（僕が覚えていないだけ）な彼女が風邪、か。それがよりによっても今日、理科の授業のある日だというのだから救えない。

化野学。あだしのまなぶ。そう、そういう名だった。嫌でも覚えている。授業で毎回、頭で名乗るのだ。自分が教師になった理由はこれだと。そりゃあ、人名を憶えないことについては随一の僕でも憶えてしまうというものだ。そんなに名前を押すのなら、何故“理科”である中学じゃなく、“化学”である高校の教師にならなかったのか、と僕は聞いたことがあるが、その答えはこうである。

『あん？　オレが化学っつったら化学何だようるせーなメガネ。あ、オレもか。かっかっか！』

などと人を笑い飛ばし、

『まーなんだ。言うほど化学得意じゃねーンだよね、オレ。いや、普通に学生時代イイ点取ってたぜ？　だが教えるとまでなると……理科レベルじゃなきゃあ無理なんだよなあ……かっかっか！』

なんてのたまいやがった。

まあそんな性格の化野教員、授業も意地が悪いとしか言いようがなく（これに関しては委員長も同意する。あの優しさ溢れる委員長がである。）、その授業風景といえば、

『オレの授業は、ちゃーんと聞いてることが大前提だからな！　教

科書よりノートや授業中の話の中からテストに出すから、しっかりとノートとっとくように！　あん？　休んだらどうすんのかって？　ダチに聞け、ダチに。ダチが頼りにならねえ？　んじゃ職員室に聞きに来い。しっかりばっちり教えてやるよ』

……とまあ、最初は口悪い以外はまあまともだったのだが、

『はーい、今消したとこ、テストに出まーっす、と。消すとは先に言ったからなー、最初にちゃんとノートとれって言ったろー？』

とか、

『んーこっからここまでの空欄、宿題な。あん？　多いって？　別にやんなくても良いぜ、成績には含まねえよ。……まあ、こっからテストに出すけどな？』

とか、

『私もういや……あの先生、一対一でもあの調子で、もう精神持たないよう』

とは、職員室に聞きに行ったポニ子の談だったり。……そんな感じなのだ。そんなトラウマ持ちの彼女が委員長に頼むのは当然であった。しかも理科の授業は水木の連続であるため、風邪が長引けば明日も泣きつくことになるだろう。

———なんて、以前の僕だったらしないだろう心配をしてみつつ、僕は委員長の次の言葉を耳に入れた。

「ついこの前遊んだ時は元気だったのになぁ……あ、それでねーメガネくん。今日の放課後、ポニ子ちゃんのお見舞いに行こうと思ってるんだけどっ」

へー、それはいいね。と適当な相槌を念話で打ちつつ、羨ましい、と勝手に思ってみたりする。

「メガネくんも行かないかな？」

……はあ？
僕が？　ポニ子の？　お見舞いに？　女の子の部屋に？　行けって？
「う、うわ……そんな言い方しなくても……いいよー、そだね、メガネくんはシャイなボーイだからね」
なんだとう。委員長こそ、わざわざ行ってウィルスもらってくるなよ？
「ダイジョブダイジョブ！　わたし身体強いし！」
そう言ってふん、と無い力こぶを見せつけつつ、無い胸を張る委員長。それに僕は、委員長の心配なんかしてないよ、ただ持ってこられたら僕が感染してしまうかもだろ？　と、言い返す。もちろん冗談だが。
「あはっ」
僕の冗談に、おかしそうに笑う委員長。そしてきっと僕も笑ってる。早朝の人気の少ない教室に、委員長の楽しそうな笑い声と、僕の声無き笑い声が響いた。
それは楽しい、とても楽しい、日常で。
もうすぐ終わるかもしれないと、そう思ったら……どうにも悲しくなってくる。
きっと、僕には自信がないんだ。お姉ちゃんの前に立って、“今の自分”を保てるのか――――。
「？　めっがねくーん？　どうかしたの？」

そんな不安定な僕を、心配してくれる委員長。ありがとう。大丈夫。大丈夫。君が友達でいてくれる限り、きっと僕は、大丈夫――。

そんな風に、僕は自分自身に言い聞かせて、朝の貴重なひと時を無駄に浪費して過ごしたのだった。

そして翌日、木曜日。

ゴールデンウィーク前日。

委員長は見事風邪をうつされて、ポニ子共々学校を休んだのでした――。

3―2

……さて、どうしたものか。

そんな思考を僕が開始したのは、委員長が風邪を引き（時期的に恐らくはポニ子と遊んだ時に感染していたのだろう。昨日移ったにしては発症が早すぎる）、ただなんとなく、別にお見舞いとかに行こうとしたわけでは決してなく、興味本意でそれとなしに、委員長の家ってどこだろう、思ったからである。

……いや、それもかなり怪しいな。正直に言おう。僕は委員長のお見舞いに行きたいと、そう思った。

だがさて、その為の情報を僕はいかにして入手する？

委員長と僕、二人の共通見解として、僕たちは出会ってからの期間に比例しているとは言い難い程、仲良く、信頼を結べている。そんな話は委員長に確認せずとも解るし、以前ポニ子を含め談笑していた時に、ポニ子に僕との交友を突っ込まれた委員長は、こう言ったのだ。

『そりゃもち、わたしのかけがえの無い友達っ。すごーく気が合うんだって、わたしは思ってるよ』

当時はまだ表だった感情が閉ざされていた僕はさらりと流したが、今思うと嬉し恥ずかしい台詞である。委員長は大体恥ずかしい台詞を言っている気もするが、素敵な感性の持ち主であるのということなのだろう。いや、馬鹿にしているわけではなく。

きっと。

彼女の澄んだ瞳には、この世界は素晴らしい物に映っているのだろう。

あの頃の。

―――超能力少年になる前の僕のように。

……と、また話が脱線してしまった。そんな感じで、僕と委員長はまあ仲が良い。しかし、如何せん知り合っての期間が短いために、

お互いの家など知らない。携帯もない。そしてそれを知っていそうで、僕とコミュニケーションをとれる唯一であろう存在であるポニ子は、当然欠席。

……さて、どうしたものか。

意味もなく思考が流転する。メビウスの輪からは抜け出せず、僕は頭を悩ませるままだった。

委員長によく指摘されることだが、僕という人間は一端思考を開始すると、大抵泥沼にはまり込み、延々と無限螺旋を巡り続ける性質がある。そして、その間は聴覚が遮断され、人の話を聞けなくなってしまうのだ。　さて、ここまで言ってしまえば多くを語る必要もあるまい。

そう、僕が、延々と終わらない思考を続けていた僕が今受けている授業は――――、

「はいっと！　今日のとこはこんなもんだな。んじゃ今日の内容の復習プリント配布すっから！　来週までにはやっておけ！　なぁに安心しろ。今日の授業をちゃぁんと聞いて、ノートをきっちり取ってりゃラクショーだ！　な！　かっかっか！」

――――この男。この学校一の性悪、化野学の授業だった。今日は委員長も、ポニ子もいない。そしてボクは、アイツの授業を上の空でさっぱり聞いていなかった……つまり。

成績ダウンを防ぐためには、職員室に赴き、この男に教えを請わなければならない、ということだ。

な！　と化野先生が言った時、奴は僕を見ていた。意地の悪い顔で、四角いメガネを光らせながら。……彼は僕が授業を上の空で聞いていたのを見て、あえて注意せず、こういったことを仕掛けてきたのである。……いや上の空で聞いていた僕が悪いのだけれど、だけれども、こういう男なのだ。彼は。

……しょうがない。“久々”に、先生の特別授業を受けていこう

――。

やれやれ、委員長のことを考えている場合では無くなったな……。

――。

「よーよー、久しぶりだなあ、不良君！　イインチョーとつるむようになってから、お前が来なくなって寂しかったぜー？」

そんなことは全くなくて、全然寂しくなかったように皮肉っぽく笑うその男、化野に連れられて、僕は指導用の教室へと連れられてきていた。この部屋にはパソコンがあり、キーボードがある。これで僕は楽に会話ができるので、普通の生徒なら嫌うであろうこの部屋を、僕は結構気に入っていたりした。

「今日はイインチョー休みだったからなあ！　もしかしたらと思ってたんだ。かっかっか！」

《笑ってんじゃねえよ不良教師》

僕はそんな無礼な文章をキーボードに叩いてディスプレイに羅列する。……この先生とは一年の頃、何度か世話になった（と言うべきだろう）ことがある。不自由であった僕に、積極的なコミュニケーションをとってきた、唯一の先生なのだ。委員長並みの変人である。その善性は委員長と比べるべくもないが。

「言うねえ問題児。かっか！　やっぱお前さんとは遠慮なしでいい」

それはこちらの台詞だ。一年の頃から、この人と話している時、気が休まっていなかったかと言えば、今考えれば休まっていたのだろう。やはりそれも、当時は感じることのできなかったことであるのだが。とはいえ、委員長と違って決して友好的な接触ではなかったので、そんなに良い印象も持ちにくかったのだろう。

と、僕は当時を推察しつつ、キーボードを叩き鳴らす。

《そうだな》

と、シンプルに、同意を。それがだいぶん意外だったのか、化野先生は細い眼を見開いて驚きつつ、「おいおい、随分素直じゃねーか」と言って、「イインチョーのおかげかね、こりゃ」と、冷やかすような笑顔で続けた。

僕が図星をつかれてしまう形だ。この男、よく見ている。委員長と僕との関係も知っているような口ぶりだったし……。案外、生徒思いなのかも。

「かっかっか！　黙りこくっちまってどうしたよ――――いや、お前さんはずっと黙ってるか。かっかっか！」

……とても、そうは見えないが。ただの人間観察好きかもしれない。つーか笑いすぎだ。どんだけ人からかって楽しんでるんだ。

と僕が呆れたような、諦めたような気持ちで先生を見ていると、その視線に気づいた先生はにかっとはにかんでから、机の上のプリントを手に取った。いよいよ補修が始まるらしい。

「んじゃあ補修を始めっかね不良君？　今日の授業は濃かったからなあ。長引くぜ――――」

《甘んじて受けるよ。僕の自業自得だし》

と僕は返信しながら、これはある意味丁度良いかもしれない、と思っていた。
最近僕は悩みすぎだ。委員長とか、お姉ちゃんとか、確かに重要で、大切で、忘れてはならない究極だ。……けれど、だからこそ、そんな重い悩みをずっと抱えていたら、頭がパンクしてしまう。僕はそんな判断を下して、補修にまじめに取り組もうと先生から補修プリントを受け取った。

「———なあ」

と、そこに。水をさすように、言葉が上から落ちてきた。
僕は立ったままの先生を見上げ、なんだよ、と視線だけで答える。

「わからんが……よく、わからんがな不良君。悩みはさっさと解決したほうがいいんだぜ？
それが大切なことなら、なおさらな。自分が耐えられないとか、壊れちまうとか、そんなのは結局———逃げでしかないんだよ」

「……」

「かっかっか！　ちょいくさかったか？　悪ぃな、オッサンだからセンスがな」

なにを、見透かしたような———ことを、言うんだ。
僕はキーボードを打って、言い返してもいい。
お前に何が解る———なんて、陳腐で独りよがりで、卑怯なその言葉で。……僕はそんなことは、嫌だった。
そうして、僕は何も返事をしないまま、手元のプリントに目を移した。

「……ま、いいさ。お前さんの決めることだ。さっ、補習補習」

僕の態度に諦めたのか、どうでもよくなったのか、先生はそのままいつものように補習を始めた。

そんな先生の授業を聞きつつ、僕は必死に、がむしゃらに、悩みを暫く、一時だけ忘れる為にそれを受けるのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0329s/

無口な僕と委員長な君

2011年10月8日22時13分発行